新潮文庫

色ざんげ

宇野千代著

新潮社

色ざんげ

定價100圓

新潮文庫 草27A

昭和二十四年三月十日發行
昭和四十四年三月十五日 二十六刷

著者 宇野千代
發行者 佐藤亮一
發行所 株式會社 新潮社
郵便番號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話 東京二六〇局一一一一(大代)
振替 東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

塚 印刷・東洋印刷株式會社 製本・新榮社製本所
© Chiyo Uno 1949 Printed in Japan

新潮文庫

色ざんげ

宇野千代著

新潮社版

56

色ざんげ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

○

どこから話したら好いかな、と暫く考へてから彼はゆつくりと語りはじめた。外國から歸つて間もなく蒲田に二階二間階下三間くらゐの小さな家を借りて、僕は二階、女房と子供は階下とまるで別々の生活を始めた。もうその頃は別れ話もだいぶん進行してゐてただ具體的な問題の片附くのを待つてゐるといふだけだつた。何しろ僕は十年振りに見る日本の女がきれいできれいで眼がさめると家を飛びだし街をほつき歩いたり夜はおそくまでダンスホールやカフエーを漁り歩いたりして歸つて來るといふ風で幾日も女房の顏を見ないことの方が多かつた。或る夜のこと歸つて見ると机の上に女文字の手紙が一通のせてある。高尾と署名してあるから高尾何子とでもいふ女だらうと思つてあけて見るとさうではなくて中には小牧高尾とちやんと書いてある。いかにも高尾といふやうな男名前に適はしい女の書いた手紙らしく達者な筆つきで二枚ほどの用箋に何か譯の分らぬ詩のやうなものの書いてある後に、自分の家は千駄ヶ谷の德川さんの邸の近くだからぜひ一度遊びに來て呉れと書いてある。戀文といふにはひどくあつさりした抽象的な戀文だし、僕はそのまま讀み捨てて眠つて了つたのだが、その翌日も歸つて見ると同じやうな手紙が机の上

にのせてあつて、今度は詩のあとに返事がほしいと書いてある。翌日もその翌日も同じやうな封筒がのせてあつたが、僕はもう披いて見る氣もなくそのままにしておいた。そして一週間くらゐも根氣よく手紙が續いてから或るときのこと、それまでの細長い封筒ではなくちよつと大型な西洋封筒に變つてゐるのを見て何氣なく披いて見ると、手紙のほかにその女のだといふ若い女の寫眞が一枚入れてあつたが、女の背後には虎の皮の擴げてある椅子やピアノなども見えてなかなか中產階級的な長閑さだ。翌朝出がけに僕はそれを女房に見せて遣つた。「あら、お金持のお家らしいぢやあないの、あなたもう逢つてるんでしよ？」「冗談言ふな、向うから手紙を寄起したりする女に逢ふものかい。」「だけどちよつとくらゐ遊んで遣つたつて好いぢやあないの、きつとお金持よ。」女房はなかなか洒落れた口を利くが、寫眞の女はちやうどそれくらゐしか美しくなかつたのだ。そんなことがあつてから後も相變らず手紙は來る。別に氣にとめてゐるとも思はなかつたのに僕は半分その女の根氣のよさに呆れながら、ダンスホールでもカフエーでも女を摑へては訊いて見た。「君たちの中に小牧高尾つて言ふ女ゐる？」そんなことで僕も相當に手紙の女のことを氣にするやうになつてゐたのかも知れぬ。或る夜のこと家に歸つて來て、机の側にちやうどもう五寸くらゐの高さに積重ねてあるその手紙の中から出鱈目に一つ拔きとつて封をきつて見るともうそれには詩などは書いてなく、明日の夕方六時から六時半までのあひだ、千駄ヶ谷の驛の改札口で待つてゐるから來て呉れ、わたしは髮に紅い造花の薔薇の花を挿してゐる、とただそれ

だけの文面が三行ほどに書いてある。勿論僕は行きはしなかつたのだが、一體その次の日の手紙には何と書いてあるだらうと思ひながら次の日附のを披いて見ると、一字一句前のと同じ文句でわたしは髪に紅い造花の薔薇の花を挿してゐる、と書いてある。僕はちよつと面白くなつて今度はその前の日附のをあけて見るとやはり造花の薔薇の花をと書いてあつて、次のも次のもちやうどその晩屆いたのも合せて十二三通ほどの手紙がみんな同じものなのには呆れて了つた。僕はそれでもつと以前のに遡つて最初の二三通のところまでみんな封をきつて見る氣になつた。すると薔薇の花の前は凡そ七八通ばかりはどれにもあの虎の皮の上に腰をかけた寫眞が入れてあつて、それ以前のには譯の分らぬ詩が續いてゐる。僕はしばらくその夥しい文反古の中に坐つてゐる間にその女に對して異常な興味を感じはじめてゐる自分に氣がついた。明日の夕方は行つてやらうとそのときさう思ひついた。

翌くる日の夕方、千駄ヶ谷の驛へ下りたのは六時二十分すぎくらゐであつた。フォームの階段を半分も下りたと思ふと、そこの改札口のところに背丈のたつぷりした若い女が眞直ぐにこつちを向いて立つてゐるのが見える。この頃よく雜誌などの寫眞で見るフェリシタ夫人のしてゐるやうな工合に、長い髪の毛を編んでゆるく額の上に捲きつけそれに紅い造花の薔薇の花を挿してゐるのが、ちやうど夏の日のことだから六時すぎと言つてもまだ晝のやうで外苑の方の明るい廣場を背景にして却つて顏ははつきり分らぬけれども氣のせゐか寫眞よりも若くいきいきした女のや

うに思はれる。側まで來ると、女はきらりと光るやうな眼をあげてまともに僕の顏を見た。僕はわざとゆつくりした足どりでそのまま廣場を左手へ人力車の溜りの横を馬道に沿うて曲つて行つたが、何となく背後から迫つて來るやうなその女の眼が感じられる。こんなときはなかなか「あなたは小牧さんですね、」などと言へるものではないと見える。僕は女の眼の屆かぬところまで歩いて行つてからちよつと立留つた。そしてそこの並木の繁みを透して驛の方を振返ると、女はまたもとの姿勢に戻つて後向きに立つてゐる。やはり僕とは氣づかなかつたのかなと僕はさう思ひながら暫くそこに立つて見てゐると、軈てくるりと向きをかへて眞直ぐに德川さんの邸の方へ歩き出した。多分きつかりと六時三十分になつたからなのだらうと思ふが、いかにも機械的な動作で未練げもなくさつさと引上げて了ふのだ。僕はしばらく間をおいてから女のあとをつけた。驛から一町くらゐのところを右に折れた角邸（かどやしき）の德川さんの家よりももつと嚴しい石門のある中へ消えて行く。門札には「小牧與四郎」と出してあつて、古びた薔薇の植込がとんねるのやうになつて奧庭に續いてゐる。女の草履の音がまだその奧で聽えるやうなのを僕はちよつと度膽（どぎも）を拔かれたやうな氣持でそこに立つて耳をすましてゐたが、やがて八幡社の方の通りに近いところに一軒の米屋を見出してその親爺に訊いて見ると、そこは小牧與四郎と言ふ三菱の重役の家で、主人の與四郎は中國や臺灣などに旅行してゐることが多く、留守中はこの間まで華族女學校に行つてゐた一人娘のお孃さんがゐるきりだとそんなことまで話して呉れた。そのお孃さんといふのがあ

の女なのだらうかと僕は何となく獵奇的な興味に驅られながら、しかしさつき改札口のところでちらりと見た女の大柄な嚴つい體つきや僕の方を見たときの光るやうな眼つきなどを思ひ合して戀を感じると言ふのには少しの感傷も柔かさもない女のやうな氣がしたが、それにしてもこの頃のやうに夜となく晝となくカフエーダンス場などに入りびたつてそんなところの女たちとばかり遊んでゐる僕にとつては何か新鮮で風變りな相手のやうに思はれた。その日はそのまま、もう街へも遊びに廻らずに家へ歸つて來るとやはり机の上には紅い薔薇の花をといふ手紙が置いてある。そこで翌くる日は少し早目に家を出て床屋に行き途中で靴を磨かせたりして千駄ヶ谷のプラットフォームに降りると、女は昨日と同じところに同じ姿勢で眞直ぐに立つてゐる。僕の姿を認めたと思ふと一種の確信のある足どりでつかつかと近づいた。「湯淺さんでせう？　やつぱり湯淺さんですわね、」さうだと答へると、「あなた昨日もここへいらしたでせう？」と言ふ。何だか正直に答へたくなかつたので、いや、いまここへ來たのが始めてだと言つた。「そんなことないわ、でもあんなに急いで行つてお丁ひになつたからひよつと違つた方かと思つたけど、」「ぢやああなたは毎日ここで待つてゐたんですか？」「ええさうよ。だつてあなたはきつといらつしやるに極つてるんですもの、」女はさきに立つて歩き出した。僕はそのあとを追ひ乍ら女のよく發育した手足や血色の好い頰を見た。「どういふ譯であんなに毎日手紙を寄越したんです？」「そんなこと訊くもんぢやないわ。もしあなたが來なかつたらこれからさき三月でも三年でも續けて出す積り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だつたの、何でも思つてることを途中で止したことなんかないのよ、あたし、」女は昨日の石の門の前で僕を振返つた。「ちよつと寄つてらつしやらない？」僕は女の後から薔薇の繁みのとんねるを潜つて裏庭の方にある離れの洋館へ上つて行つた。部屋の中はもう少し暗かつた。女は低いスタンドの紐をひいた。するとその仄かな明りの中にあの寫眞にあつたピアノや虎の皮のかけてある椅子が見え、それから壁にピンで留めてある新聞からの切抜きらしい僕の寫眞なども見える。「お酒のむでせう？」女は僕に何かの洋酒をすすめた。間近に見る女の顔は女といふよりもまるで子供のやうな稚げな表情をもつて、その子供らしさのために恐れを知らぬといふ風に見える。「どうして僕に逢ひたいなどと思ひついたのです？」「まだそれを訊きたいの？」女はちよつと笑つた。「あなたが好きだからよ。あたしあなたを愛してるの、」「愛してる、」僕は笑つた。「愛してるつてあなたはこれまでに戀愛なんかしたことあるの？」「あるわ。あたし一とう最初はうちの家庭教師を愛してたのよ。でも直きにそんなことをしてるのが馬鹿らしくなつたの。馬鹿らしいと思つたらその日に、自分であたしその男を馘にしたわ。」さつきからもうだいぶん時間が經つけれども誰もこの部屋に來るものはないし、母屋の方からも物音が聽えない。「ぢやあどうして僕のことを好きだと思つたの？」「あなたに汽車で逢つたからよ、」みんな話して了ふわと言つて女の語り出したところによると、彼女は僕が日本へ着いた日に神戸から東京まで乘つた汽車の中で僕と一緒になつた。臺灣から歸つて來るその父を大阪で待合せてやがて食堂車で少し

やすんだりして座席に戻つて來ると、すぐあとからやつて來た僕が彼女の食堂車に置き忘れて來た扇をこれはあなたのでせうと言つてその父に渡したのだと言ふ。さう聽けばそのときのことを思ひ出すやうだけれども、彼女だつたのだらうかと思はれるその少女は紺色の水兵服か何かを着て絶えずうつむいて編物をしてゐたやうだつたので僕にはまるで覺えがなく、却つてその側に坐つてゐた白髮の老紳士の脂ぎつた額や鋭い眼ざしの中に彼女のそれに似通つたものがあつたかと思はれる。その夜汽車が東京驛に着いて家族や友達などに迎へられ新聞社の寫眞班に圍まれてゐる僕を見てあれは何者であらうかと翌朝の新聞をたのしみに披いて見て僕が外國にながい間ゐた湯淺讓二といふ洋畫家で蒲田の留守宅に落着いたと言ふことを知つたけれども、しかし家に父の留つてゐる間は何をすることも出來ない。「あたしとても上手に二人の人間になれるのよ。パパのゐる間はそれはおとなしいお嬢さん、パパがゐなくなると手のつけられない不良少女になつちまふの、」いつでも兩側に女中が一人づつついてゐて自動車の窓から外へ眼をやることも禁じられてゐるやうなお嬢さんもやるのだけれども、不良少女の役の方がもつと上手にやれる。早くまた父が臺灣へ行つて了へば好いとそれでも二十日くらゐも待つたのち、やつと或る日のこと父を東京驛へ送り出して了ふとその足ですぐに蒲田の警察署へ行つて僕の新しい住所と家族とについて調べて貰つてから、人力車に乘つて僕の家の前まで行つて見た。もう少しで這入らうと思つたけれども思ひ直して引返し、それからは毎日のやうにあの手紙を書いたのだと言ふ。「ぢやあ

僕におくさんや子供のあることも知つてるんですね？」「そんなこと」と女はそのうすい唇を反すやうにして言つた。「そんなことはだつてあなたのことぢやないの、何でもありやしないわ。どんなおくさんだか知らないけど、でもそんなおくさんなんかよりあたしの方が好いにきまつてるわ、」「どうしてきまつてるんです？」「きまつてるわ、」獨り言のやうに繰返してからちらりと眼をあげて僕を見た。「あなたみたいなひとがあんなお家にゐて畫を描いてゐるなんて、」さう言つてちよつとの間口を噤んでゐる女の横顔を見てゐる中に彼女の言はうとしてゐることが僕には判るやうな氣がした。この華族女學校のお嬢さんはいくらか僕の暮し向きについて僕を憐んでゐるらしく、さうでなければ案じてゐるらしい。僕はちよつと、小さな子供にをぢさんは馬鹿だねと言はれたときくらゐに機嫌を悪くした。その機嫌の悪さを隱さうとするためのやうに僕はそつと女の手をとつた。「駄目よ、觸つちや駄目、」とび上るやうにして女は部屋の隅の方へ體をにじらせてから、そこからぢつと眼をすゑて僕の方を見た。僕はしかし女を追つては行かなかつた。やがてあんまりおそくなるからと言つてそこを出ると、女もつづいて驛まで送つて來た。「また明日ね、」女は別れるときにさう言つた。

翌日になるとしかし僕はもう出掛けて行く氣がなくなつてゐた。戀をする相手といふにはあんまり衛生的な體つきと率直な性格とをもつてゐる彼女はほんの少しの感傷しか僕の心に殘さなかつたやうなのだ。それにほんたうのことを言ふと僕にはまだいくらかあの「面喰ひ」の氣持が殘

つてゐて、さう美人といふほどではない彼女をむきになつて追ひ求めようとはしなかつた。その中にだんだんと日が經つて僕は自分の仕事の一つである秋の展覽會に出品するための制作が忙しくなつて來る。「こんなに情熱に燃えてゐる女をそのままにしておくなんて罪惡だ。」と書いたり、「逢ひに來てくれなければ何をするか分らぬ。」と書いたりした女の手紙が相變らず毎日のやうに來てゐたが、或る夕方僕は珍しく自分の家の二階で聲樂家の龜井雄二郎や畫家の園田修吉などと一緒になつて女房の給仕をうけながらビールをのんでゐると階下で誰かを呼んでゐるやうな子供の聲が聽える。すぐ降りて行つた女房が階段のところから僕を呼んだ。「あの女よ、あの女があなたを呼んでくれつて言つてるのよ。」近所の八百屋の門さきまで來てそこの子供を呼び出しの使ひに寄越したのだと言ひながら、さう言つてゐる女房の白粉をつけた白い顏は固く硬つたやうな表情になつてゐる。いつだつたか寫眞を見たときには、ちよつとくらゐ遊んでやつたつて好いぢやないのなどと利いた風なことを言つてゐた癖に、と思ひ乍ら僕はまた何か言つたりするのが面倒だつたので大きな聲をして言つた。「構ふことはないぢやないか、誰を待つてゐようと待つのは向うの勝手ぢやないか、」「だつて圖々しいつたらないんですもの。さんざんへんな手紙をよこしといて、今度は呼び出しに來るなんて、」「どうしたんです？」音樂家の龜井が鹿爪らしい顏をして訊くと、女房はそのままそこへぺたりと坐つて、さも惜さげな調子をもつて客に女のことを話した。「しかし君、そんなのをいつまでも放つとくのは不可ないよ。興味がないんならない

つてはつきり君の口から斷つてやるのがほんたうだよ。」「斷つたつて同じなんだよ。」やがて三十分もたつと思ふと今度は表から近所の俥屋の親爺がやつて來て、ちよつとそこまで僕に來てくれと言ふ。あとで行くからとさう言つて俥屋を歸してやると、龜井は眞顏で僕の方へ向いた。「あんなところで待たしとくなんて不可ないよ。おくさんも僕らもかうして坐つてるんだからその前ではつきり言つてやつたら好いぢやないか。さうし給へ、」眞面目な氣持といふよりは見物人のおせつかいな氣持からであらうと思ふが龜井は自分で俥屋の前に待つてゐると言ふ女を呼びに起つて行つた。間もなく龜井と一緒に女がやつて來た。僕らの晩餐は何だか會議でもひらいてゐるやうに固くなる。その中でも女房は一番遠くの方から明らかに敵意を見せた構へをもつて女の顏を見詰めてゐる。「いまも話したのですが、」龜井はさう女に言つた。「あなたのやうな若いお孃さんが湯淺君のやうな男に夢中になるといふのはどうですかな、」「どういふ意味ですの？」女は詰問するやうに龜井の顏を見た。「いや、どういふ意味と言つてしかし、湯淺君にはおくさんもあるし子供もあるし、」「知つてますわそんなこと。でもそんなことはあたしに何にも關係のないことですもの。」「まあ、何ですつて、」女房はかつとなつたやうな聲を立てて言つた。「まあおくさん、僕に任せといて下さい。ねえ小牧さん、僕の言つてることはたいへん常識的なことかも知れませんが、どうせ默目なことにきまつてるのに」「きまつてなんかゐないわ。」いまの彼女にとつてどうすることも出來ないのは僕を好きだといふ彼女の氣持だけだ。さう言つてゐる女の

様子は、側に僕の女房のゐることなど猫の仔のゐるほどにも思はぬらしい。龜井は「ふうむ」と呻るやうな聲を立てた。さういふ有様の龜井もそれから女房も何だかそはそはと狼狽(あわ)てゐて、この席で落着いてゐるのは彼女ひとりのやうにも見える。「失禮ですが、今夜は僕がお宅までお送りしませう。決して悪いやうにはしませんから、」やがて龜井はそんなことを言つて女をつれて出て行つた。そのひよろひよろと高い後姿が隣りの生垣の向うに消えるのを二階の手摺によりかかつて見送つてゐた女房は、いらいらして言つた。「何て甘い男ばかり揃つてるんでせう。」

翌日ひる過ぎにまた龜井がやつて來た。「君は馬鹿だよ。」僕の顔を見るとすぐにさう言つて「小牧與四郎と言ふのは君あの有名な三菱の小牧與四郎なんだぜ。こんな幸運をみすみす逃がして了ふなんて馬鹿だよ。それにあのお孃さんはちよつと好いぢやないか、あんなにはつきりしてる女の子つてないぜ、」「はつきりし過ぎてて、氣違ひなんだよ、」「しかしあの氣違ひぶりは面白いぢやないか。ちよつと下賤な女の子の持つてない味だぜ、」龜井は無暗に感心して見せてからちよつと聲を落して、實はゆうべ一緒に家まで送つてゆく途中で今日君を女の家まで連れて行く約束をして了つた。悪いやうにはしないから是非俺の顔を立てろと言ふ。「がみがみ言ふな、行つてやるよ。」いつの間にか龜井の仲人口にのつて見る氣になつた僕は日の暮れるのを待つて一緒に家を出た。女の家の前まで來ると龜井はさきに立つて表玄關から案内を乞うた。古風な裝飾をした廣い應接間で暫く待つてゐると軈て扉があいていつものやうににこりともしない顔のまま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com